

【公報種別】特許法第 17 条の 2 の規定による補正の掲載

【部門区分】第 1 部門第 2 区分

【発行日】平成 18 年 6 月 29 日 (2006.6.29)

【公表番号】特表 2005-526571 (P2005-526571A)

【公表日】平成 17 年 9 月 8 日 (2005.9.8)

【年通号数】公開・登録公報 2005-035

【出願番号】特願 2004-506709 (P2004-506709)

【国際特許分類】

A 6 1 F 13/02 (2006.01)

A 6 1 L 24/00 (2006.01)

A 6 1 L 15/58 (2006.01)

【F I】

A 6 1 F 13/02 3 5 0

A 6 1 F 13/02 3 4 5

A 6 1 L 25/00 A

A 6 1 L 15/06

【手続補正書】

【提出日】平成 18 年 5 月 11 日 (2006.5.11)

【手続補正 1】

【補正対象書類名】特許請求の範囲

【補正対象項目名】全文

【補正方法】変更

【補正の内容】

【特許請求の範囲】

【請求項 1】

創傷を処置する方法であって、前記方法が：

1 以上の創傷閉鎖材を創傷の対向側面上の皮膚に接着することによって創傷の対向する縁部を閉じた状態に保つステップであって、前記 1 以上の創傷閉鎖材の各創傷閉鎖材がバックিং、前記バックিংの一主面上にある接着剤層、および創傷架橋部を含み、前記 1 以上の創傷閉鎖材の各創傷閉鎖材の前記創傷架橋部が創傷の対向する縁部に接するステップ；および

前記 1 以上の創傷閉鎖材の前記接着剤層を用いて、創傷を横断する形で前記 1 以上の創傷閉鎖材を接着した後に、前記 1 以上の創傷閉鎖材に隣接する創傷に流動性接着性皮膚用塗布剤を塗布するステップを含み；

前記接着性皮膚用塗布剤が創傷上の皮膚に前記 1 以上の創傷閉鎖材を接着しない方法。

【請求項 2】

ある量の流動性接着性皮膚塗布剤；

バックিং、創傷の上に配置するのに適した創傷架橋部、および感圧接着剤を含む少なくとも 1 つの創傷閉鎖材を含み、前記接着性皮膚塗布剤が少なくとも 1 つの創傷閉鎖材の前記創傷架橋部を皮膚に接着しない、創傷閉鎖システム。

【請求項 3】

前記少なくとも 1 つの創傷閉鎖材が；

対向する弾性端部；および

前記端部間をまたぐ創傷架橋部を含み、

前記創傷閉鎖材は 30% 伸長した後に少なくとも 85% 回復し、そして同一の力を加えた時に前記創傷架橋部は前記端部に比べ伸長が小さく、それによって前記創傷架橋部は皮膚の伸長により生ずる力に対抗して創傷を閉じた状態に保ちやすくなる、請求項 2 に記載のシステム。

【請求項 4】

シロキサン含有ポリマー 1 ~ 40 % ; アルカンをベースとしたシロキサンポリマー反応溶媒 60 ~ 99 % ; および補助剤 0 ~ 15 % を含む所定量の流動性接着性皮膚塗布剤 ;

バックング、創傷の上に配置するのに適した、微細孔性ポリプロピレンフィルムを含む創傷架橋部、および感圧接着剤を含む少なくとも 1 つの創傷閉鎖材を含み、前記創傷架橋部と皮膚との間の接着強度が約 30 グラム / センチメートル以下である、創傷閉鎖システム。

【手続補正 2】

【補正対象書類名】明細書

【補正対象項目名】0034

【補正方法】変更

【補正の内容】

【0034】

次に図 5 を参照すると、4 つの創傷閉鎖材 12 を協働して用いて、本例では患者の腕に例示されている創傷 (W) の創傷縁部を閉じた状態に保っている。特に留意すべきことは、創傷閉鎖材 12 の長端部および短端部 30a および 30b が交互に創傷の反対側に配備されるように端部 30a および 30b が交互に配置されていることである。拡張部 30a および 30b は創傷閉鎖材 12 の固定力を高めるが、もし創傷閉鎖材が左右対称であったならば、創傷閉鎖材は示されているような直線状の創傷に沿って互いに干渉しあい、重なり合うだろう。言い換えれば、それらをどれだけ近接して一緒に配置するかが制限され、この制限により創傷のより密な結合を必要とする例への使用が妨げられることになるだろう。しかし図は、端部 30a および 30b の長さが不等であることにより創傷閉鎖材 12 を入れ子状に配置することができ、それにより創傷の遮蔽度を小さくしながら、創傷をまたぐ結合点の数を創傷全長にわたって十分確保し、同時に皮膚に強固な固定を得るための面積を増やすことができることを示している。

【手続補正 3】

【補正対象書類名】明細書

【補正対象項目名】0035

【補正方法】変更

【補正の内容】

【0035】

図 5 では、接着性皮膚塗布剤 14 の範囲が創傷閉鎖材 12 に隣接する領域内に置かれていることも分かる。接着性皮膚塗布剤 14 が塗布された領域は、好ましくは創傷閉鎖材 12 の下ではなく、その隣接部であることが好ましい。しかし、図 4 に示されるように、毛細管現象により 1 以上の創傷閉鎖材 12 架橋部 24 の下にある接着性皮膚塗布剤 14 を吸引することがある。しかしながらこの問題は、創傷閉鎖材 12 が創傷架橋部 24 で多孔性であり、その結果創傷閉鎖材 12 の下に吸引された接着性皮膚塗布剤 14 は乾燥するものとして対処されるだろう。別の方法では、接着性皮膚塗布剤 14 は接着性創傷閉鎖材 12 の上および隣接部の両方に塗布される。しかし、好ましい接着性創傷閉鎖材 12 の多孔性 (少なくとも創傷架橋部内) により、接着性創傷閉鎖材 12 と患者の間の接着性皮膚塗布剤 14 を乾燥させることができる。